

桜美林論考

The Journal of J. F. Oberlin University

自然科学・総合科学研究

Natural and Applied Sciences

2019年3月

March 2019

桜美林大学 自然科学系／総合科学系

J. F. Oberlin University Divisions of Natural Sciences / Integrated Sciences

# 本学駅伝プロジェクトについての研究（第3報）

（発足からの5年間）

A Study of the Ekiden Project (Report No. 3)

5 years since inauguration

武田 一<sup>※1</sup>

キーワード： 桜美林大学，陸上競技部，箱根駅伝

## はじめに

6年目を迎えた本学駅伝プロジェクトは「大学および学園の一体感およびブランド力の向上を目指す（ONE TEAM）」ことをミッションとし箱根駅伝出場へ挑戦している。10月中旬に開催される箱根駅伝予選会には、毎年、多くの方が国営昭和記念公園（東京都立川市）にて熱い声援を送っている。その数は、教職員、OACU（桜美林大学体育文化団体連合会）で結成される応援団300名以上にも及ぶ。加え、現地応援に参加する本学学生・卒業生・ご父兄など本学関係者、本学を応援していただいている町田・相模原の方々やテレビ中継での応援を含めると多くの方々が注目する本学の一大イベントとなっている。

初めて4学年がそろった第94回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会（2017年10月14日）<sup>注1</sup>の結果は21位（10時間28分25秒）であった。2014年の初参加（29位，11時間06分06秒）以来、毎年チーム成績は少しずつ向上しているが予選会通過はまだ程遠いのが現状である。しかし、レダマ・キサイサ（グローバル・コミュニケーション学群2年，ケニアTERENDE卒）選手が本学初の予選会トップでゴールし，田部幹也（健康福祉学群3年，出雲工卒）選手が56位（60分46秒）の成績を残し関東学生連合チーム（以下，連合チーム）<sup>注2</sup>に選出されたことは明るい話題となった。そして，田部選手が本学初の箱根駅伝ランナーとして第94回東京箱根間往復大学駅伝競走の3区（2018年1月2日）を駆け抜けた。このことは，箱根駅伝に出場するための条件が少しずつではあるが整ってきたことでもある。

本研究の目的は，過去5年間の駅伝プロジェクトの報告と予選会のレース分析を中心に箱根駅伝に出場するため方策を考察することである。

なお，個人情報については関東学生陸上競技連盟（以下，関東学連），陸上競技関係掲載紙などにより一般に公開されている情報を使用し，本文に掲載されている研究対象者には，研究の内容及び方法を説明し，理解を求めたうえ，個人情報等が掲載される旨，同

---

※1 TAKEDA, Hajime 桜美林大学総合科学系，スポーツ推進センター

意を得て協力していただいている。

注1) 第94回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会(通称,箱根駅伝予選会)は,陸上自衛隊立川駐屯地の滑走路をスタートし立川市街をとおり国営昭和記念公園をゴールとする20kmのロードレースである。本大会への出場は上位10名の合計タイムが少ない10位以内の大学である。出場資格は関東学連男子登録者で,平成28年1月1日より申込日(平成29年10月1日)前日までに5000mを16分30秒以内もしくは10000mを34分以内の公認記録をトラックで有する者がエントリーできる。エントリーは10名以上14名以下とし出場人数は10名以上12名以下である。

注2) 関東学生連合チームは,本予選会を通過できなかった出場校の記録上位者を中心に選考される。第94回大会は16名選出された(田部選手は連合チーム4番目の順位で選出)。なお,第89回大会までは「関東学生選抜チーム」の名称であった。

## 駅伝チーム発足の経緯

筆者が本学に赴任(2002年4月)当初から佐藤東洋士学長(現,学園長・理事長)から度々駅伝を行わないかという打診があったが,部員と予算の確保,寮,指導者,練習環境など解決しなければならない問題が大きすぎ一教員の対応では不可能であるためスタートしなかった。しかし,近年,理事会で学園全体の一体感を醸成する取り組みとして,しばしば「箱根駅伝」が話題として取りあげられ箱根駅伝を目指す機運は少しずつ高まってきた。そして,志村望理事長室部長(現,幼稚園園長)の接点から山梨学院大学を訪問し,陸上競技部上田誠仁監督にチーム運営の方法とそのための条件などをインタビューした。その結果,2013年4月に山梨学院大学に在学中(1992年4月~1996年3月)に大学三大駅伝<sup>注3)</sup>で区間賞を取り(出雲4回,全日本1回,箱根2回),チームを優勝(出雲4連覇,箱根2連覇)に導き,その後,実業団で活躍した真也加ステファン氏を監督に招聘しチームを立ち上げた。

チーム発足当時の2013年度は長距離部員が0名のため真也加監督と筆者は全国へリクルーティングに赴いた。しかし,その1年間は選手獲得以前に関東以外では本学の存在が知られておらず,知っている方も「(高校)野球の桜美林ですか?」との認識しかなかった。そのため,本学の概要(所在地,学群制,学修内容,就職状況,授業料,ミッションなど)と駅伝チームを取り巻く環境(寮,練習場所,大学のサポート体制など)を伝え,まず本学を知ってもらうことから始まった。それは,地元の東京都インターハイ支部予選(4月)から始まり全国各地で行われるインターハイ都道府県予選(5月),インターハイ地区予選(6月),インターハイ(8月)に加え,全国から生徒が集まる日本体育大学長距離競技会など各競技会に赴き,一人でも多くの高校指導者に会い,様々な伝手を頼りに本学の説明を行った。加え,近隣の練習場所の策定をおこない,陸上競技場(町田市立野津田,相模原市立ギオンスタジアム,愛川町三増など)や尾根緑道,淵野辺公園ジョギン

グコース、境川沿いなどを視察した。そして、練習の用途としてトラック、クロスカン  
トリーコース、ロード（起伏のあるコース、平坦なコース）など様々な良い環境に恵まれて  
いることが分かり、高校指導者に練習環境の良さをアピールした。

その結果、2014年に1期生16名（スポーツ推薦12名、一般4名）が入学しチーム  
がスタートした。その中には、真也加監督の尽力により高校駅伝有力校（九州学院高校、  
中京学院大学附属中京高校、加藤学園高校、富山商業高校など）から選手が入学したため  
高校・大学関係者から注目された。そして、本学初挑戦となった第91回東京箱根間往復  
大学駅伝競走予選会（2014年10月18日）は1年生だけで臨んだため多くのマスメディ  
アに取り上げられ、日本テレビ系列でのライブ中継では数分にわたり南裕也（健康福祉学  
群1年、九州学院卒）主将の力走と共に本学の紹介がなされた。結果は29位（出場48校）  
11時間06分06秒でその一歩が記された。

注3) 大学三大駅伝とは、毎年10月に開催される出雲全日本大学選抜駅伝競走（出雲駅伝、1989  
年から）、11月に開催される全日本大学駅伝対校選手権大会（全日本駅伝、1970年から）、1  
月2日～3日に開催される東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝、1920年から）である。

## 箱根駅伝予選会

### 【予選会記録の推移】

箱根駅伝予選会<sup>注4)</sup>において国営昭和記念公園で開催された第77回（2000年）からの  
記録の推移(表1)を見ると、出場校が年々増加(第77回大会30校から第93回大会50校)  
していることが分かる。また、第83回大会以降のコース変更後の記録を見ると、1位の  
記録は10時間05分前後、予選会通過ライン（10位）の記録は10時間15分前後とあ  
まり変わらないが、20位は第83回大会10時間51分30秒から第94回大会10時間26  
分32秒では15分もの大幅な記録の短縮が見られる。このことから、本学も含め大学のバッ  
クアップの下、予選会突破を目指すチームの増加が中間校の記録の上昇につながっており、  
今後とも熾烈な競争が推測される。

注4) 戦後直後までは箱根駅伝の参加校が少なかったため予選会は開催されていなかった。その  
後、参加校が増加したため、1955年から第10回関東学生10マイル大会を第32回箱根駅  
伝予選会として予選会が始まった。その後、会場は転々とし23年間会場になっていた大井  
埠頭（1977年～1999年）から第77回大会予選会（2000年）現在の昭和記念公園に移った。  
そして、第83回大会予選会（2006年）から陸上自衛隊駐屯地をスタートする現コースになっ  
た。第95回大会予選会（2018年）にはハーフマラソン（21.0975km）となり距離が変更  
された。

標準記録については、第69回大会予選会（1992年）で参加校が50校となりその後50校  
を超えるようになったため、第75回大会予選会（1997年）から5000mで17分以内、ま  
たは10000mで35分以内の参加標準記録が設けられた。そのため、第74回大会予選会（1997

年)の参加数54校から第75回大会予選会(1998年)45校,第76回大会予選会(1999年)では32校と減っていった。しかしまた,参加校は増加したため第87回大会予選会(2010年)に5000mで16分30秒以内,または10000mで34分00秒以内となった。そして,第95回大会予選会(2018年)から10000mで34分00秒以内と変更された。

表1 予選会が国営昭和記念公園で開催されてからの記録の推移

大会	年	1位	10位	20位	本学	1位	10位	20位	出場校数
第77回	2000	10時間23分14秒	10時間36分04秒	11時間24分50秒	—	大東文化大学	国士館大学	青山学院大学	30
第78回	2001	10時間07分45秒	10時間18分43秒	11時間03分57秒	—	早稲田大学	国学院大学	国際武道大学	34
第79回	2002	10時間10分20秒	10時間25分29秒	10時間55分51秒	—	東海大学	専修大学	流通経済大学	34
第80回	2003	8時間37分50秒	8時間44分25秒	9時間24分30秒	—	法政大学	拓殖大学	国際武道大学	37
第81回	2004	10時間09分07秒	10時間13分55秒	10時間44分44秒	—	早稲田大学	東京農業大学	慶應義塾大学	36
第82回	2005	10時間10分17秒	10時間19分41秒	10時間53分34秒	—	東海大学	拓殖大学	国際武道大学	39
第83回	2006	10時間06分53秒	10時間16分58秒	10時間51分30秒	—	早稲田大学	拓殖大学	立教大学	44
第84回	2007	10時間10分49秒	10時間16分38秒	10時間45分43秒	—	中央学院大学	法政大学	松陰大学	42
第85回	2008	10時間13分20秒	10時間21分01秒	10時間42分08秒	—	城西大学	大東文化大学	麗澤大学	45
第86回	2009	10時間03分39秒	10時間15分40秒	10時間30分32秒	—	駒澤大学	亜細亜大学	関東学院大学	47
第87回	2010	10時間11分39秒	10時間27分35秒	10時間50分19秒	—	拓殖大学	法政大学	関東学院大学	36
第88回	2011	10時間12分08秒	10時間19分39秒	10時間45分00秒	—	上武大学	順天堂大学	関東学院大学	40
第89回	2012	10時間04分47秒	10時間15分28秒	10時間39分42秒	—	日本体育大学	拓殖大学	松陰大学	45
第90回	2013	10時間04分35秒	10時間12分29秒	10時間31分23秒	—	東京農業大学	城西大学	麗澤大学	44
第91回	2014	10時間07分11秒	10時間14分03秒	10時間35分49秒	11時間06分06秒(29位)	神奈川大学	創価大学	亜細亜大学	48
第92回	2015	10時間06分00秒	10時間12分04秒	10時間31分20秒	10時間54分45秒(30位)	日本大学	上武大学	流通経済大学	49
第93回	2016	10時間08分07秒	10時間16分17秒	10時間36分10秒	10時間41分04秒(25位)	大東文化大学	日本大学	明治学院大学	50
第94回	2017	10時間04分58秒	10時間10分34秒	10時間26分32秒	10時間28分25秒(21位)	帝京大学	東京国際大学	亜細亜大学	49

注1) 第77回大会(2000)から第82回大会(2005)は国営昭和記念公園周回(20km)で開催

注2) 第83回大会(2005)からは陸上自衛隊立川駐屯地~立川市街地~国営昭和記念公園(20km)で開催

注3) 第80回大会(2003)は箱根町芦ノ湖(16.3km)で開催

□ は最高記録

## 【本学の記録の推移】

4年間の記録(表2)は総合タイムと共に総合順位も上がっているが,第94回大会予選会においては予選会通過に17分51秒(1分47秒/人)記録を伸ばす必要がある。また,おおよその目安として100番以内が5名,200番内に5名入る必要があるが,現状では100番以内が2名のみである。

また,3年目までは1年生が出走することが多く,2年連続で予選会を走れる選手が少なかった。しかし,4年目は昨年度に続いて8名出走できたことがチームの成長を表していると考えられる。予選会を通過した10チームはスーパールーキーが加入したチーム以外は2年生以上のチーム編成となっているが,予選を通過できなかったチームの多くは1年生が2~3名いる傾向にあった。高校までは5000mのレースが中心であるが,予選会の20kmに対応するためには練習量の増加が必要となる。そのため怪我のリスクが大きくなり選手層の薄いチームほど1年生をエントリーせざるを得ない状況となる。本学はよう

やく4年目で1年生に頼らず、長期にわたり練習を積んできた2年生以上のエントリーが可能となった。そのため、1年生をじっくりと育てられるようになってきている。

表2 本学選手の成績

	第91回 (2014年)				第92回 (2015年)			
	29位：11時間06分06秒				30位：10時間54分45秒			
	順位	20km	名前	学群	順位	20km	名前	学群
1	58	60.57	ラザラス・モタンヤ	健福1	242	63.24	田部 幹也	健福1
2	269	64.58	小高 真基	健福1	244	63.29	小高 真基	健福2
3	322	65.57	吉川 健真	健福1	261	63.48	平野 秀一	BM1
4	338	66.24	南 裕也	健福1	277	64.10	森 駿太	健福1
5	370	67.04	森山 隆秀	健福1	337	65.27	森山 隆秀	健福2
6	383	67.23	高橋 啓	健福1	373	66.22	安西 亮介	BM1
7	394	67.44	和田 海希	健福1	374	66.25	嶋津 颯太	健福1
8	422	68.18	南 拓哉	BM1	391	66.52	石川 純平	LA2
9	423	68.20	星 喬暁	LA1	399	67.03	南 裕也	健福2
10	440	69.02	菅原 宙斗	健福1	424	67.45	和田 海希	健福2
11	465	70.02	富田 寛治	健福1	438	68.10	萬上 和海	LA2
12	515	72.05	萬上 和海	LA1	482	69.36	富田 寛治	健福2

	第93回 (2016年)				第94回 (2017年)			
	25位：10時間41分04秒				21位：10時間28分25秒			
	順位	20km	名前	学群	順位	20km	名前	学群
1	2	58.27	レダマ・キササイサ	GC1	1	57.27	レダマ・キササイサ	GC2
2	178	62.56	田部 幹也	健福2	56	60.46	田部 幹也	健福3
3	187	63.05	坂田 光	芸文1	211	62.30	森 駿太	健福3
4	252	64.13	安西 亮介	BM2	239	63.02	前山 晃太郎	健福1
5	274	64.39	仲原 圭亮	健福2	243	63.03	星 喬暁	LA4
6	275	64.42	星 喬暁	LA3	252	63.12	平野 秀一	BM3
7	285	64.56	古川 正裕	BM2	259	63.19	阿川 大祐	健福2
8	317	65.48	阿川 大祐	健福1	321	64.54	坂田 光	芸文2
9	328	66.06	田中 智貴	健福2	323	64.55	佐藤 拓巳	LA2
10	330	66.12	佐藤 拓巳	LA1	336	65.17	小高 真基	健福4
11	358	66.44	嶋津 颯太	健福2	360	65.54	松本 瞬	健福1
12	387	67.26	小高 真基	健福3	384	66.35	永瀬 孝	健福1

## 本学の主力選手（2018年）

### 【レダマ・キサイサ】

本名、JOSPHAT LEDAMA KISAISA. 1998年6月25日、ケニアで生まれる。ケニアの部族はマサイ族。TENDERE Secondary Schoolを2015年12月に卒業。2016年度秋学期、グローバル・コミュニケーション学群に入学。学習意欲があり勤勉で日本に馴染みそうな留学生を真也加監督がリクルーティング。入学前はケニアの長距離ランナーを育てるキャンプで練習を積み、2016年ケニアジュニア選手権10000m（6月22日、ナイロビ国立競技場）では11位（29分06秒46）であった。5000mの自己記録は14分00秒。

日本に来て2か月にも経たない第93回予選会で果敢にレースを引っ張り2着となる。2017年の第96回関東学生陸上競技選手権大会男子2部10000mで2位（28分21秒61）となるが第97回関東学生陸上競技選手権大会では男子2部5000mと10000mで2冠（MVP受賞）を達成。2年次以降は、日本学生陸上競技選手権大会でも優勝（表3、図1）。第94回大会予選会では1着となった。そして、第95回大会予選会では圧倒的な強さを見せ、2連連続の1着となった。トラックの記録において入学当時は学生長距離界でもトップクラスではなかったが、毎年、自己記録を更新している。現在、学生長距離界を代表する選手に成長した。

予選会20kmのレース分析（図2）としては、2016年は15kmまで先頭を引っ張るもラストでパトリック・ワンブィ（日本大学2年）選手にスパートされ12秒差の2着に終わる。2017年は昨年以上のハイペースで15kmまで押していき、10km過ぎから独走態勢をつくった。その結果、2着のドミニク・ニヤイロ（山梨学院大学3年）選手に6秒差をつけ、昨年敗れたワンブィ選手には1分25秒（4着）差をつけ雪辱した。キサイサ選手は長い距離が得意なため（しかし、ラストのスパート力には欠ける）前半からハイペースに持ち込み、中間地点以降で相手を諦めさせる戦法を主にとる。

表3 キサイサ選手の記録の推移

2018年10月14日現在

		箱根駅伝予選会		トラックの記録				日本インカレ	
西暦	学年	順位	記録	5000 m		10000 m		5000 m	10000 m
2016	1	2	58分27秒	14分19秒57	7月9日	29分22秒82	9月24日	—	—
2017	2	1	57分27秒	13分35秒19	9月9日	28分14秒79	11月25日	—	優勝
2018	3	1	60分44秒	13分35秒18	5月5日	27分52秒74	7月11日	優勝	優勝

\*日本インカレ：天皇賜杯日本学生陸上競技対校選手権大会

\*2016年、2017年は20km、2018年はハーフマラソン



図1 日本インカレ 5000 m決勝で先頭を走るキサイサ選手（2018年9月8日、学園広報室撮影）

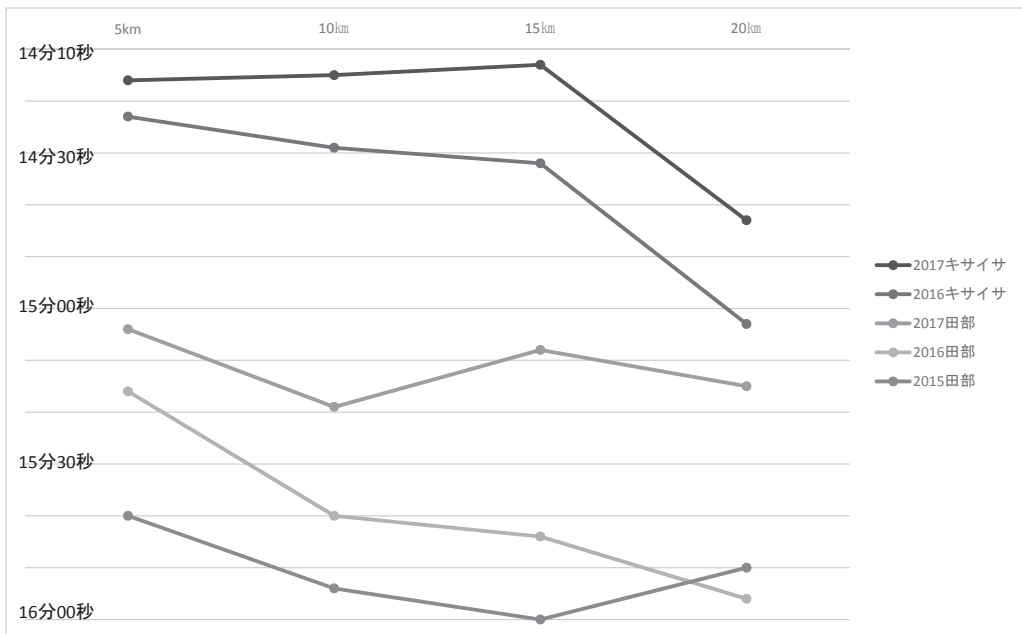


図2 予選会のキサイサ選手と田部選手の5 km毎のラップタイム

### 【田部幹也】

1996年4月15日、島根県で生まれる。島根県出雲工業高等学校を2015年3月に卒業。新しいチームで自分の力を伸ばしてみたいという願望があり本学健康福祉学群に入学。高校時代は島根県で頭角を現すが中国地区大会止まりでインターハイには出場できなかった。3年次の第69回国民体育大会（長崎）で島根県代表に選出され、少年男子 A5000



m (2014年10月20日, 長崎県立総合運動公園陸上競技場)に出場し30着(15分18秒70)であった。高校時代の自己記録は5000mで14分35秒59。なお, 出雲工業高校は全国高等学校駅伝競走大会(京都)において2017年まで22回連続26回出場の名門校である。

大学入学後, 第245回日本体育大学長距離競技会(2015年6月7日, 日本体育大学健志台陸上競技場)5000mで14分50秒04とセカンド記録(14分50秒64)を更新し, トラック種目(5000m, 10000m), ロード(20km)とも毎年更新している(表4)。

予選会20kmのレース分析(図2)としては, 2015年はラスト5kmで上げているのが特徴的である。初めての20kmのレースとなるため15kmまで力をため, 昭和記念公園の起伏(約14km~ゴール)に対応した走りをしており, ペースのコントロール能力が優れていることがうかがわれる。2016年はチームのエースとしてタイムを稼ぐため前半から15分16秒と昨年より24秒も速く入り10km以降, 失速を抑えてながら走っていることがうかがわれる。そして, 連合チームに選出された2017年は15分04秒と更に速く5kmを入り10kmからペースアップするというコントロール能力に加えタフさを備えたレースはこびとなった。それは2015年2016年のレースの経験をもとにトレーニングしてきた成果が結果として出たレースであった。

第64回大会予選会(2017年10月14日)において56着(60分46秒)となり, 連合チーム(16名選出)の4番目として選出(10月17日)された。なお, 本大会の選手選考方法については, 10月19日に第1回監督・主務ミーティングを日本大学本館, 10月24日に第1回スタッフミーティング<sup>注5)</sup>を関東学連事務所で行い, 第94回箱根駅伝学生連合チームにおける10名の選手選出方法を決定した。その選手選出方法は, 予選会(20km)と10000m記録挑戦競技会(以下, 挑戦会)の合計タイム上位10名を選手として選考。その後, 事前にアンケートを取った希望区間と面談をもとに区間を決定することとなった。また, 選考会においては16名全員を同一組でエントリーし, 組の目標タイムは28分50秒~29分00秒(挑戦会全体で2番目~3番目に速い組)とされた。

そして, 慶応大学日吉キャンパス陸上競技場にて挑戦会10組目(本大会選考会)が, 10月23日16時45分に35名でスタートした。4レーンからスタート(予選会の順位により1レーンから整列)した田部選手は調子が良くなかったため序盤, 最後尾についていき幾度となく集団から離れそうになるも, 持ち味の粘り強さを発揮し20着でゴール。選考対象者の10番目(29分46秒26, 自己新記録)に入り本大会のエントリーを確実にした。レース当日, 18時30分からのミーティングで本大会の出場が内定した(図3)。

そして, 第94回東京箱根間往復大学駅伝競走(2018年1月2日~3日, 大手町読売新聞社前~箱根町芦ノ湖駐車場入り口)において, 本学史上初の箱根駅伝ランナーとして田部幹也選手が3区(21.4km, 戸塚中継所→平塚中継所)を駆け抜けた(図4)。その模様は, 日本テレビ系列で戸塚中継所の襷渡し(放映時間約2分)と真也加監督のインタビュー(箱根駅伝今昔物語, 放映時間約4分30秒)と共に全国に放映された。

レース後のインタビューでは「一人でできなかったが応援がすごくて励みになった。15 kmから練習不足で足が止まってしまったがそれまでは気持ちよく走れた。」との本人談。

注5) スタッフは、監督に武者由幸（日本大学駅伝監督）氏，コーチに山本佑樹（明治大大学長距離コーチ）氏，と長谷川淳（専修大学監督）氏，マネージャーに山田幸輝（神奈川大学：関東学生陸上競技連盟常任幹事）氏の4名が就任した。スタッフの選考は，予選会で落選したチーム上位3チーム，日本大学（11位），明治大学（12位），専修大学（14位）から選ばれた。なお，13位の創価大学は学生連合チームに選手が選出されなかったので除外された。

表4 田部幹也選手の記録の推移

2018年11月10日現在

		箱根駅伝予選会		トラックの記録			
西暦	学年	順位	記録	5000 m		10000 m	
2015	1	242	63分24秒	14分50秒04	6月7日	31分11秒16	9月27日
2016	2	178	62分56秒	14分34秒52	4月2日	30分57秒50	12月3日
2017	3	56	60分46秒	14分29秒34	6月10日	29分46秒26	11月25日
2018	4	82	64分21秒	14分21秒94	6月16日	29分49秒73	11月10日

\* 3年次、関東学生連合チームに選出（第94回大会にて3区出走：2018年1月2日）

\* 2015年～2017年は20km，2018年はハーフマラソン



図3 本大会出場が内定した直後の田部選手（2017年11月25日、学園広報室撮影）



図4 平塚中継所手前を力走する田部選手（2018年1月2日、学園広報室撮影）

#### 【初めての箱根駅伝】

2018年10月17日に関東学連より報道各位に「第94回東京箱根間往復大学駅伝競走関東学生連合チーム選手決定について」としてプレスリリースされ正式に田部幹也選手のエントリーが発表された。本学の指導スタッフはこの決定を受け、田部選手が4番目に選考されたため、本大会の選出の可能性は高いと判断し、正月の本大会に向け力を発揮し活躍ができるように約2か月間の強化トレーニングとレース直前の調整スケジュールを組んだ。しかし、1週間後の10月24日に関東学連より選手選考方法（予選会20kmのタイムと10000m挑戦会の合計タイムでの順位）が提示されたため、確実に本大会に出場できるよう11月25日の10000m挑戦会に向けてスケジュールを組み替えた。この結果、本大会が20km以上ロードで走るにもかかわらず、トラックで10000mの記録を出すためにスピード練習を多く取り入れることとなった。また、トラックよりもロードで力を発揮する田部選手は選手選考において大きくハンデ（10000mの持ち記録は低いため）を背負うこととなった。以上のことから、目標は箱根駅伝出場、本大会へのメンバーに選出されることとなり、本大会での活躍は次の目標となってしまった。なお、この選手選考については、他大学の指導スタッフからも、「なぜ予選会の結果で選出しないのか」「トラックとロードの結果は異なる」「箱根駅伝に向けてのトレーニングの一貫性が保てない」など反対意見が相次いだ。この選手選考により、予選会順位、9番目（芝浦工業大学）、10番目（麗澤大学）の選手が外れ、11番目（日本大学）、12番目（亜細亜大学）の選手が本大会のエントリーメンバーとして登録された。

選考会で本大会 10 名に入った後、目標は本学初の箱根駅伝に必ず出場することになった。そして欠場だけはしないように、怪我などを防止するため 8 割程度の余裕のある練習とインフルエンザなど病気に罹患しないように準備を行なった。当然、練習量が足りていないためレース後半のペースダウンは想定内となってしまった。

その後、連合チームは、合同練習会（11 月 11 日、日本大学文理学部キャンパス）、合同合宿（12 月 15 日～ 17 日、千葉県富津市）を行いチームワークを高めていった。

1 月 1 日、田部選手と付き添いの村田駿弥（健康福祉学群 3 年）本学駅伝主務は 10 時 30 分に日本大学文理キャンパスに集合し、昼食をとった後、補欠の田島光（関東学院大学）選手と戸塚駅前の相鉄フレッサイン横浜戸塚に宿泊した。

1 月 2 日、連合チーム内では、2 区の選手が怪我をしており出場が危ぶまれていると聞いていたため、7 時に関東学連のホームページで発表されるメンバー変更を待っていた。しかし、メンバー変更は 1 区（インフルエンザのため）、5 区（怪我のため）の報告。このことは、エースを 1 区に起用している連合チームにとって、1 区から大きく遅れる可能性が非常に高くなることに加え、練習不足の選手が最長区間の 2 区を走ることが確定したことにより、3 区の田部選手にとりレースプランを考える上で重大な問題となった。当初想定していた 3 区<sup>注6)</sup>で襷を受け取った時に集団の中においてレースをするプランは白紙となり、襷を受け取ってから周りに誰もいない単独走になることを覚悟した。そのため、3 区からの繰り上げスタートという最悪のことも想定して、準備するよう指導スタッフは助言をした。実際、繰り上げ（3 区では先頭と 10 分差）ぎりぎり 3 秒での襷リレーとなり、その後は 21.4 km を独りで走りきることとなった。

なお、本学の応援団は、遊行寺坂、茅ヶ崎公園野球場、湘南海岸公園の 3 か所に特別強化クラブの部員（各ポイント 20 名程度）が中心となり早朝から応援の準備を行った。そして、200 名程の教職員・学生に加え多くの方が応援にお越しいただいた（図 5）。

注 6) 3 区（21.4km、戸塚中継所→平塚中継所）は、戸塚の丘陵地帯から藤沢市内を抜け、湘南海岸沿いを走るコース。前半 5 km 過ぎからの遊行寺の急坂の上りがポイントとなる。その後、藤沢市内を抜け国道 134 号線の海岸線の平坦なコースに入りペースアップする展開になるが、気象の変化が激しく強い向かい風の影響、無風時の気温の上昇など変化に応じた走りも見どころとなるコースである。今回のように大きく離れての単独走になると海岸沿いの長い直線で前が見えないため目標を定めづらく疲労と共にペースダウンする可能性が高くなるコースである。

表5 第94回東京箱根間往復大学競走、3区の結果 (2018.01.02)

	関東学生連合 (オープン参加)		第3区 (21.4km)	
	田部 幹也 (桜美林大学)		成績：区間 21 位	
	距離	総合タイム	5 km毎のラップタイム	1km 毎のラップタイム
戸塚中継所	1-5 km	15 分 15 秒		(3.02-2.58-3.06-3.03-3.03)
↓	6-10 km	30 分 38 秒	15 分 23 秒	(2.45-3.10-3.03-3.11-3.08)
	11-15km	46 分 16 秒	15 分 38 秒	(3.04-3.06-3.07-3.07-3.09)
	16 - 20 km	63 分 04 秒	16 分 48 秒	(3.14-3.17-.3.26-3.25-3.21)
平塚中継所	21-21.4km	67 分 34 秒	4 分 30 秒 (1.4 km)	(3.18-1.07)



図5 湘南海岸沿いを力走する田部選手と応援団 (2018年1月2日、学園広報室撮影)

### 【本学の今後の指針】

本学が箱根駅伝に出場するためには、田部選手レベルの選手が複数名、それに近い選手を10名は育成することが必要となる。そのためには、先行研究でも本学の選手は後半の失速率が高いことが挙げられているため20kmを走り切る基礎的走力の養成と自分の力を発揮するコントロール能力の養成が必須条件となる。また、1年間で1日しかない予選会にピンポイントで10人がピークを合わせるためそのピーキング能力も必要となり、そのためにはエントリー14名が常にカバーできる選手層の厚さが求められる。

具体的な指針としては、しっかりと基礎的走力をつけるための走り込みと後半ペースアップし失速率を抑える走力を獲得し、20kmにおいての失速率3.0%以内、15～20kmを15分30秒以内で走る必要がある。

2018年、キサイサ選手が日本学生チャンピオン、田部選手が箱根駅伝出場者としてチーム内に明確な目標像ができたことは大きな意味がある。また、二人とも数年かけ Step by

Step で成長していることは、他の選手への道しるべとなろう。今後、二人の姿を追ってレベルアップし、そして、今は夢の箱根駅伝に一步でも近づき出場できるよう指導スタッフもサポートしていきたい。

## おわりに

2013年4月から始まった駅伝プロジェクト箱根駅伝への挑戦は、2017年初めて4学年そろって戦った。そして、チーム成績として順位・タイムとも過去最高を記録したが、まだまだ予選会通過には程遠いのが現状である。今後ますますレベルアップされることが予想される箱根駅伝予選会。その厳しい中で、まずは桜美林らしい指導による現有選手の育成を第一に、加えリクルーティングの更なる強化、練習環境の整備、情報の発信、サポーターのさらなる確保など多くの課題がまだまだありその一つ一つを整えていく必要がある。この途方もないチャレンジには「詮方つくれども望みを失わず」の精神、桜美林スピリットをもって答えていくしかないと思っている。

最後に、この駅伝プロジェクトにご支援いただいております学園関係者の方々、応援いただいております皆様に感謝いたしております。

## 引用・参考文献

- 1) 武田一：清水安三と体育・スポーツ，桜美林論考「自然科学・総合科学研究」第4号，1-13，(2012)
- 2) 武田一：本学駅伝プロジェクトの取り組み，桜美林論考「自然科学・総合科学研究」第5号，95-111，(2013)
- 3) 武田一：本学駅伝プロジェクトの取り組み（新チームの発足），桜美林論考「自然科学・総合科学研究」第6号，15-27，(2014)
- 4) 武田一：本学駅伝プロジェクトについての研究（第1報）（第92回箱根駅伝競走予選会のレース分析から），桜美林論考「自然科学・総合科学研究」第7号，61-72，(2015)
- 5) 武田一：本学駅伝プロジェクトについての研究（第2報）（第92回箱根駅伝競走予選会のレース分析から），桜美林論考「自然科学・総合科学研究」第8号，25-36，(2016)
- 6) 花田勝彦：上武大学駅伝部 箱根駅伝までの歩み，上武大学ビジネス情報部紀要第8巻第1号，1-7，(2009)
- 7) 廣津信義・中村明・金子今朝秋，箱根駅伝予選会での予選通過に関する確率計算，経営の科学，57巻1号，5-10，(2010)
- 8) 箱根駅伝歴史シリーズ【第1巻】激闘の予選会史，ベースボールマガジン社，104-130 (2012)
- 9) 陸上競技マガジン 2014年15月号，ベースボールマガジン社，10-19 (2015)
- 10) 「第95回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会」要項，関東学生陸上競技連盟，

- <http://www.kgrr.org/event/2018/kgrr/95hakone-yosenkai/youkou.pdf>(2018. 9. 24 アクセス)
- 11) 「第 94 回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会」要項, 関東学生陸上競技連盟,  
<http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-yosenkai/youkou.pdf>(2018. 9. 24 アクセス)
  - 12) 「第 94 回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会」総合結果, 関東学生陸上競技連盟,  
<http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-yosenkai/sougo.pdf>(2018. 9. 24 アクセス)
  - 13) 「第 94 回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会」チーム成績, 関東学生陸上競技連盟,  
<http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-yosenkai/result.pdf>(2018. 9. 24 アクセス)
  - 14) 「第 94 回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会」個人成績, 関東学生陸上競技連盟,  
<http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-yosenkai/kojin.pdf>(2018. 9. 24 アクセス)
  - 15) 「第 93 回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会」個人成績, 関東学生陸上競技連盟,  
<http://www.kgrr.org/event/2016/kgrr/93hakone-yosenkai/kojin.pdf>(2018. 9. 24 アクセス)
  - 16) 「第 92 回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会」個人成績, 関東学生陸上競技連盟,  
[http://www.kgrr.org/event/2015/kgrr/92hakone\\_yosenkai/kojin-r.pdf](http://www.kgrr.org/event/2015/kgrr/92hakone_yosenkai/kojin-r.pdf)(2018. 9. 24 アクセス)
  - 17) 「10000m 記録挑戦会」男子 10000m タイムレース 10 組, 関東学生陸上競技連盟,  
<http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/10000m-kirokukai/hp/rel010.html> (2018. 9. 24 アクセス)
  - 18) 「第 94 回東京箱根間往復大学駅伝競走」関東学生連合チーム選手決定について(プレスリリース), 関東学生陸上競技連盟,  
[http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-ekiden/94kanto\\_gakusei\\_rengo.pdf](http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-ekiden/94kanto_gakusei_rengo.pdf) (2018. 9. 24 アクセス)
  - 19) 「第 94 回東京箱根間往復大学駅伝競走」総合公式成績, 関東学生陸上競技連盟,  
[http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-ekiden/sougou\\_kousiki.pdf](http://www.kgrr.org/event/2017/kgrr/94hakone-ekiden/sougou_kousiki.pdf) (2018. 9. 24 アクセス)
  - 20) 「箱根駅伝予選会」,  
<http://www13.plala.or.jp/jwmiurat/yosenkai/yosenkai03.html> (2018. 9. 28 アクセス)

## 要約

6年目を迎えた本学駅伝プロジェクトは「大学および学園の一体感およびブランド力の向上を目指す (ONE TEAM)」ことをミッションとし箱根駅伝へ挑戦している。初めて4学年がそろった第94回東京箱根間往復大学駅伝競走予選会(2017年10月14日)では21位(10時間28分25秒)であった。2014年の初参加(29位, 11時間06分06秒)以来, 毎年チーム成績は少しずつ向上しているが予選会通過にはまだ程遠いのが現状である。しかし, レダマ・キサイサ(グローバル・コミュニケーション学群2年, ケニアTERENDE卒)選手が本学初の予選会トップでゴールし, 田部幹也(健康福祉学群3年, 出雲工卒)選手が56位(60分46秒)の成績を残し関東学生連合チームに選出されたこ

とは明るい話題となった。そして、田部選手が本学初の箱根ランナーとして第94回大会の3区（2018年1月2日）を駆け抜けた。このことは、箱根駅伝に出場するための条件が少しずつではあるが整ってきたことでもある。

本学の大きな課題として、田部選手レベルの選手が複数名、それに近い選手を10名は育成することが必要となる。そのためには、20kmを走り切る基礎的走力の養成と自分の力を発揮するコントロール能力の養成が必須条件となる。また、1年間で1日しかない予選会にピンポイントで10人がピークを合わせるためそのピーキング能力も必要となり、そのためにはエントリー14名が常にカバーできる選手層の厚さが求められてくる。



